

## (2) Q-SACCS の記入方法



動画あり

### ① 記入方法

※重要な項目は赤字で表示し、一部は補綴の色に着色し、全て赤色に着色し、斜線を下し、

※重要な項目は赤字で表示し、一部は補綴の色に着色し、全て赤色に着色し、斜線を下し、

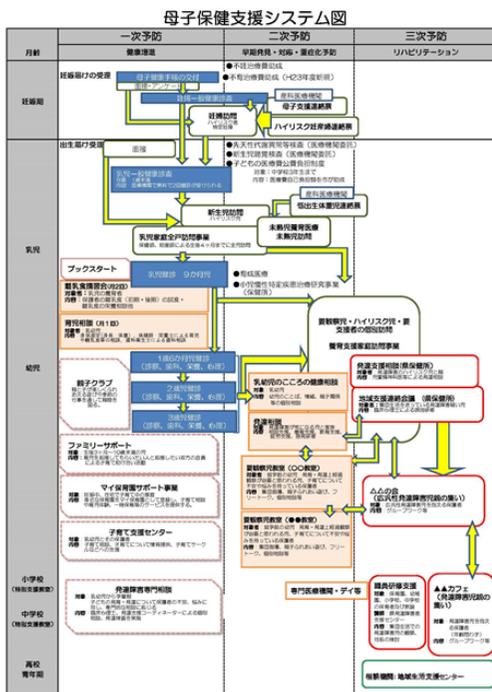
Q-SACCSの記入方法を説明します。

Q-SACCSの記入用のシートを準備してください。シートは、専用URL (<https://q-saccs.hp.peraichi.com/>)からパワーポイント・ファイルとしてダウンロードできます。このマニュアルの「Ⅲ Q-SACCSの記入用シート」のページをコピーして使ってもかまいません。

用意しているシートは、0歳から15歳までのバージョンと成人期まで記入できるバージョンの2種類です。用途に応じて使い分けてください。原理的に、Q-SACCSは横軸を伸ばしていくことで、高齢期支援への移行までを見据えた市区町村の支援体制づくりを見える化することができます。

パワーポイントをダウンロードされた場合は、各自治体の事情に合わせて適宜変更していただいても結構です。

### ② 体制図(ポンチ絵)の準備



次に、市区町村がすでに作成している体制図(「ポンチ絵」とも呼ぶ)を準備します。

体制図とは、市区町村内で実施している母子保健、子育て支援、教育的支援、障害福祉サービス等の住民サービスを図に記したものを指します。

市区町村内に既存の体制図がない場合は、③に進んでください。

ある自治体の体制図を例にとります。

縦軸には年齢が示され、横軸には1次予防、2次予防、3次予防(Caplan, 1970)の支援内容が示されています。

この体制図は、母子保健を管轄する部署で作成した母子保健支援システム図です。母子保健、子育て支援、特別支援教育、障害福祉サービスを管轄する部署が集まって合同で体制図を作っている自治体の場合は、その方がよいでしょう。この自治体のように体制図を各部署で作成している場合は、可能であれば各部署で作成した体制図を集めるようにしてください。

### ③ Q-SACCSの白い四角の枠に記入

次に、準備した体制図の中にかかれた事業・取り組み・機関をQ-SACCSに転記します。

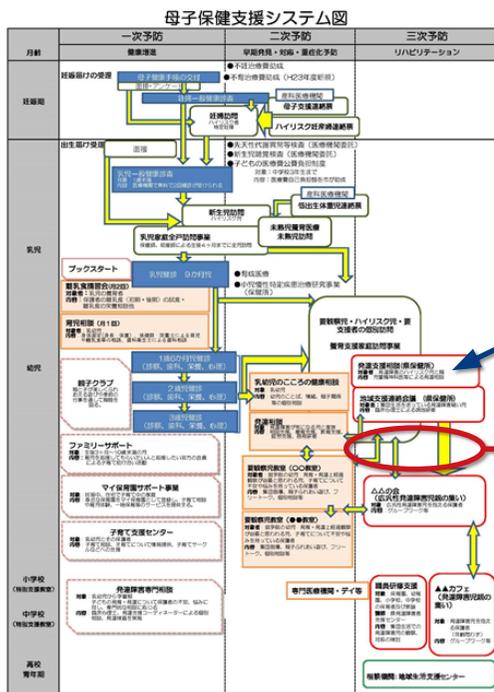
体制図がない場合、以下の内容を参照しながら、まずは自身が携わっている事業や取り組みを記入します。その後、自身が携わっている事業や取り組みの前後で行われている事業や取り組みを、わかる範囲で記入します。全ての枠を埋めることを目標にする必要はありません。

記入は、白い四角の枠から始めます。

横軸に沿って、年齢帯ごとの事業・取り組み・機関を転記します。ここでは、年齢帯は義務教育卒業までの15歳を最終年齢とします。

縦軸は、レベルIからⅢまでに振り分けて転記します。レベルIは、市区町村内のすべての子どもと家族を対象とした取り組みです。たとえば、乳幼児健診などがレベルIに該当します。レベルIIは、特定の子どもと家族を対象とした取り組みです。たとえば、児童発達支援事業などがレベルIIに該当します。レベルIIIは、医療的ニーズのある子どもと家族を対象とした取り組みです。地域で発達障害の診断と治療を行っている小児科、小児神経科、児童精神科などの医療機関を指します。市区町村内の医療機関だけでなく、市区町村外に立地していても市区町村内に在住している子どもと家族が受診している医療機関もここに記入します。

■ 体制図に書かれた事業や取り組みをQ-SACCSに転記します。



体制図に書かれた各取り組みを以下のレベルに分けて、Q-SACCSの白い四角の枠に記入してください。

- レベル I : すべての子どもと家族を対象とした取り組み
- レベル II : 特定の子どもと家族を対象とした取り組み
- レベル III : 医療的ニーズのある子どもと家族を対象とした取り組み

インターフェイス(つなぎ)を担う事業や取り組みがあれば、Q-SACCSの黄色い四角の枠に記入してください。体制図の矢印の部分は、インターフェイスとして具体化することが必要かもしれません。また、すでに事業化されているものの中にもインターフェイスを担うものがあるかもしれませんので、その場合は黄色い四角の枠に記入してください。



## ⑥事業・取り組み・機関の位置づけの整理

Q-SACCSに記入した事業・取り組み・機関の位置づけの整理

1) 白い枠・黄色い枠に記入した事業・取り組み・機関の位置づけを整理するために記号を記入します

- ：事業の全てを自治体職員で実施（公設公営）
- △：一部の機能を外部に委託して実施（公設民営）
- ：全てを外部に委託して実施（民営）

2) 自治体の発達支援システムの強みと課題を整理するために色分けします

青:事業化できている：質を担保しつつ、均てん化されている=強み

赤:明確化が課題：手続きが不明確(個人に依存している)

緑:機能強化が課題：質の向上・マンパワーの不足

次に、それぞれの事業・取り組み・機関の位置づけを整理します。事業等のすべてを市区町村の職員が行っている場合は「○」を記入します。一部を民間事業所等へ委託して実施している場合は「△」を記します。すべてを民間事業所等へ委託している場合は「□」を記入します。この整理は、Q-SACCSの枠内に記している事業や取り組みの実施要綱などを確認することで容易に行うことができます。

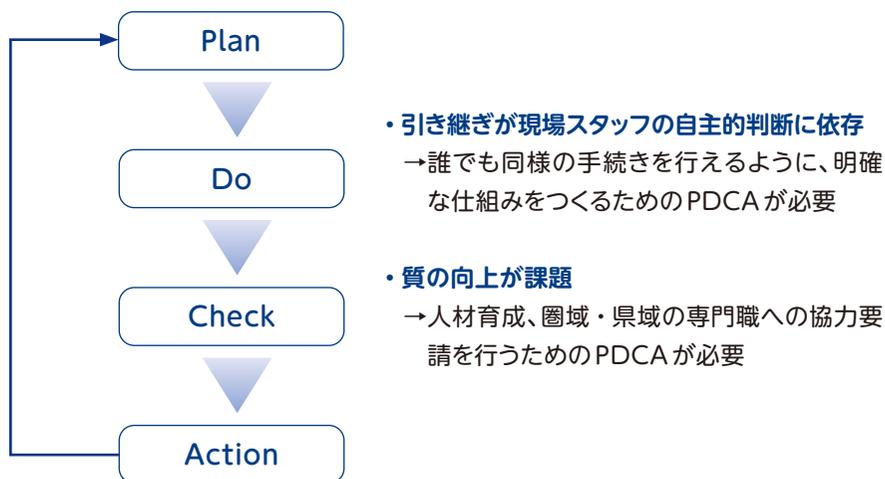
次に、Q-SACCSの枠内に記した事業・取り組み・機関の色分けを行います。この作業を行うことによって、市区町村の支援体制を点検し、現状の支援体制において何ができていて(充足していて)、何が課題なのか(足りないのか)を明確にしていくことができます。

明確に事業化できており、質が担保されている取り組みは、青い色にしてください。質が担保されているかどうかの判断は、その事業や取り組みの目的・方法・期待される効果が明文化されていることを基準として行ってください。青色で示される事業や取り組みは、市区町村の支援体制の強みになります。

その事業や取り組みの手続きが不明確であり、現場の個人に手続きが任されている場合は、赤い色にしてください。その事業や取り組みを担う人が替わると、手続きそのものが変更される可能性があるからです。市区町村の支援体制づくりにおいて、赤い色で示された課題については、個人に依存せず市区町村内で手続きを明確化し共有していく必要があります。

事業や取り組みが個人に依存せず手続きは明確であるものの、質の向上が課題となる場合やマンパワー不足が問題となっている場合は、緑色にしてください。その事業や取り組みに関する機能強化をしていく必要があります。

## ⑦ 「PDCAサイクル」による検証



たとえば、発達障害のある子どもと家族が幼児期に保育園等で受けた支援に関する情報を就学する小学校へ引き継ぐ場合に、個々の園や学校の現場スタッフの自主的判断に依存する取り組みではなく、市区町村内のどの園からどの学校に就学する場合であっても同様の手続き(誰と誰が、いつ、どのような様式で、何を目的に、どのように引き継ぎ、引き継がれた情報をどのように管理し、就学後に活かすのかなどの手続き)を行えるように明確な仕組みを作っていくためのPDCAが必要です。

事業や取り組みが個人に依存せず手続きは明確であるものの、質の向上が課題である場合は、その取り組みを担う人材の育成や、圏域・県域の専門職への協力要請を行うためのPDCAが必要です。

たとえば、乳幼児健診における子育て支援・発達支援における保護者相談の質の向上を図りたい場合は、国が推奨しているツールの用途や限界を健診従事者全員が理解すること、問診場面のロールプレイなどを実施すること、乳幼児健診マニュアルを作成することを経て、そのツールを既存の健診ルーチンに無理なく導入してみるというPDCAを実施していきます。

⑧ 例示した自治体のQ-SACCSが完成

■Q-SACCS(青:事業化できている、赤:明確化が課題、緑:機能強化が課題)

<市町村名> <人口: 人> <年間出生: 人>	0~3歳	継続的 インターフェイス (引き継ぎ) 5W1H	4~6歳	継続的 インターフェイス (引き継ぎ) 5W1H	7~15歳
レベルⅠ(毎日) 日常生活水準	○乳幼児健診		△保育園・幼稚園 ・認定こども園		○小学校・中学校
共時的 インターフェイス (情報共有、紹介等) 5W1H	○新生児訪問 ○親子クラブ ○乳幼児こころの健康相談 ○要観察児教室 ○養育支援家庭訪問 事業	○サポートブック ○保健師の引き継ぎ	△保育所等巡回相談 事業	○サポートブック ○保・幼・こ・小連絡会	○特別支援教育 コーディネーター △保育所等巡回相 談事業
レベルⅡ(定期的) 専門療育的支援	○発達相談 ○発達支援相談(県 保健所)	○サポートブック	○発達障害専門相談 ○児童発達支援セン ター(県立) □児童発達支援事 業所	○サポートブック ○教育支援委員会	○発達障害専門相 談 ○特別支援学校 ○特別支援学級 ○通級指導教室 □放課後等デイ サービス
共時的 インターフェイス (情報共有、紹介等) 5W1H	○保健師の受診同行		○保健師の受診同行 ○サポートブック		
レベルⅢ 医療的支援	□A病院<市内> ○B病院<市外>	・・・継続・・・	□A病院<市内> ○B病院<市外>	・・・継続・・・	□A病院<市内> ○B病院<市外>

\*事業の全てを自治体職員で実施○、一部の機能を外部に委託△、全てを外部に委託□、を記入下さい。

例示した自治体のQ-SACCSが完成しました。どこが事業主体となっているかを分類し、さらに色分けを行うことによって、自治体でできていること(強み)と課題が残るところが明確になりました。また、空欄が残っており、ここを埋めていくことが課題であることもわかりました。

【引用文献】

Caplan,G.著,新福尚武 監訳(1970): 予防精神医学. 朝倉書店